

キャンパスライフとは何か

MEMBER

北條 英勝

武蔵野大学副学長・人間科学部教授、
私大連学生生活実態調査分科会長

加藤 恵津子

国際基督教大学学生部長・
教養学部教授

松下 琢

崇城大学副学長(教育担当)・
生物生命学部教授

宮間 純一

中央大学文学部准教授、
中央大学生生活協同組合..2020;21年度
総代、食堂委員長

司会
山田 健太

専修大学文学部教授、
私大連広報・情報委員会
大学時報分科会委員

2020年度から2021年度 —各大学の取り組みと状況

山田 新型コロナウイルスの影響により、昨年は多くの大学で卒業式、入学式が中止となり、キャンパスへの入構が禁止になるなど大学にとっても学生にとってもこれまで経験のないような事態となりました。今年に入ってから東京では、緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が続いていますが、新たな試みや習慣もだんだんと日常化してきており、昨年ほどの混乱はなく、それぞれの大学のスタンスで運営されていることと思います。

本日の座談会は、キャンパスライフとは何かという非常に大きなテーマになります。大学は、講義さえきちんと行われていればいいということではなく、部活やサークルなどの課外活動、学食や部室などに学生がわいわいと集うことも含めてキャンパスライフであるはずで、す。2020年度、そして2021年度に入学した1・2年生においては、サークル活動なども経験できていない学生も多いことでしょう。各大学におけるそうしたキャンパスライフへの新たな取り組みや試み、学生へのケア



やサポートについて有意義な意見交換ができればと考えております。まずは、現在の大学の状況、雰囲気について各先生の自己紹介も含めて教えていただければと思います。

北條 武蔵野大学の副学長を務めております。私の専門は社会学で、人間科学部の教員でもあります。学生

部長、教務部長を経て現在は副学長として2年目です。2020年度は授業を急遽オンラインに切り替えることになりましたが、本学ではコロナ以前からオンラインやメディアを使った授業を導入すべきだという話し合いも進んでおりました。昨年度の1年生からはBYOD (Bring Your Own Device)で端末を個人持ちにして授業をしていこうという話も進んでいたため、オンライン授業への移行は比較的円滑だったと感じています。ただ、入学式などの式典がままならず、昨年度の新入生は人間関係を築くことが難しかったかもしれません。

今年度は、式典については規模を縮小して複数回に分け、実施することができました。現在の緊急事態宣言が発令される前までは、授業も対面を中心に行うことができていました。一方で、課外活動については、低調気味になっているという現状もあるため、その辺りをどうサポートしていくのかはこれからの課題であり、大きなテーマだと感じています。

加藤 国際基督教大学で学生部長をしており、文化人類学、ジェンダー研究の教員でもあります。本学は東京郊外の広大な自然の中にキャンパスがあり、学生数が

3000人ほどの比較的小規模なリベラルアーツ大学です。2020年度は他大学と同様に、春学期についてはキャンパスへの全面入構禁止を行いました。秋学期、冬学期については、部分的に対面授業を実施したり、対面とオンラインが共存するようなハイブリッド授業も行ったりしていました。しかし、昨年度の緊急事態宣言下では、事実上ほとんどのサークルが活動を自粛、学生寮についても他に住む場所のない学生以外は退寮勧告をいたしました。一方、今年度の緊急事態宣言においては、昨年ほど影響を受けず、部活動などについても、さまざまな制限はしながら継続しています。

オンライン授業の可能性と充実化への課題

松下 熊本県の崇城大学で教育担当副学長をしております。教務部長を経て、教育担当は現在3年目です。応用生命科学科の教員でもあり、再生医療関連の研究をしております。熊本の現状を語る際にどうしても外せないのが、2016年の熊本地震です。2019年度の





松下 琢氏

卒業生は、入学直後に熊本地震を経験した学生たちです。彼らの卒業式を行えなかったのは非常に残念でした。一方、学生はある普通でない状況下に置かれた時に、それが成長につながる場合があると、地震の経験から実感しています。現在のコロナ禍についても、学生たちにとって良い方向に作用してくれればと願っています。

2020年は4月から2カ月間は入構禁止にし、6月

ごろからハイブリッド授業が始まりました。本学は理工系大学であるため、実験などは対面で行わなければなりません。また、パイロットコースについては空港にキャンパスがあり、訓練飛行などは遠隔では行えません。そのため、学内で感染者を絶対に出さないように注意し、気を遣いながら過ごしてきました。今年の4月には7割対面に戻りましたが、現在は再び、講義は遠隔で行ってほしいとお願いしています。ただ、実験・実習については対面で行わざるを得ないという状況です。

宮間 中央大学文学部で歴史学を教えています。2020・21年度の中央大学生生活協同組合総代、また現在は食堂委員長を担当しています。本日は、学生の目線に近い立場から話をしてほしいということで、この場に呼んでいただきました。

新型コロナウイルスの感染が広まり、2020年3月からオンライン授業の準備に取り組みました。さまざまな懸念がある中で、実際に新学期が始まってみると、教室では普通に参加できていた学生が、オンラインではこぼれてしまうということを経験しました。

今年度からは、ハイフレックス型の授業を本格的に実

施しており、参加形態は学生が選択しています。オンラインで参加したいという学生が多いかと予想していましたが、実際には教室での参加希望が多く、驚いています。教員が考える以上に、学生は人と接する機会に飢えており、オンライン授業の充実化とともに、教室の内外で学生が安心して触れ合える空間をどのように確保していくかを検討していく必要があると感じています。

また、私が勤務する多摩キャンパスは、東京郊外に位置しており、敷地は大変広いですが、2万人ほどの学生がいます。本学では授業の半分を対面にするとしていますが、感染症対策を考慮するとキャンパスの広さの割に教室が確保できません。また、本学は兼任講師を大勢抱えているので、授業の方針を先生一人一人に正確に伝えるということも大きな課題です。このような大規模大学ならではの課題もあります。

オンラインでは補えない つながりの大切さ

山田 大学と学生のつながり、また、学生同士のつなが

りについては、どのような工夫をされてきたのでしょうか。

北條 とても難しいところですね。ソーシャルディスタンスが求められています。これは、人間の社会性に対する挑戦のようなものであると感じています。学食でも黙食をしてくださいとお願いしていますが、現実問題として、人がそばにいたら話しながら食べたいわけですよ。コミュニケーションにハードルが課せられている現状について、学生も不自由を感じていると思います。さらに本学が今一番の課題だと感じているのが、学外での学びです。いろいろな地域と連携し、現地で学ぶプログラムがあるのですが、受け入れ先も都内の学生を受け入れることは困難かもしれませんし、保護者の方も宿泊を伴うことに抵抗を感じるでしょう。現実の社会的な課題に向き合うことで視野を広げ、人間関係を形成するための科目の実施が、非常に難しくなっています。

加藤 コロナ禍で過ごしてみて強く感じることは、人と人とのつながりは、科学技術では補いきれないということ。どこの大学でも、きっと先生方はさまざまな工夫をされ、しっかりとした授業をされてきたのだと思います。しかし、どんなに良い授業をしても学生一人

一人のメンタルヘルスをケアすることはできないというのが一つの大きな教訓として残ります。決して成績も悪くない学生が突然オンライン授業の画面から消え、連絡を絶つということもありました。私たちの立場からすると、教員と学生がつながっていれば、大学としての形が保てていると思いがちですが、大学にとって授業というのはミニマムな条件であり、必要ではあるが十分条件ではありません。学生が教室に集まることでお互いから得ていた情報の多さと大切さを痛感しました。つながりは決して技術で補えるものではないと感じています。

対面の重要性の再発見と 大学外に広がるキャンパスライフ

北條 ソーシャルディスタンスの確保、3密防止によって、人と人とのつながりは希薄になってしまい、私たちは、対面で人と接することの重要性をコロナ禍において再発見したのだと思います。一つの手段としてオンラインのような技術を使うという方法もありますが、加



北條 英勝氏

藤先生のおっしゃるように、それだけでつながりを補うことは到底できません。これまで、あまり意識されていなかったごく些細なところで、つながりが学生を支えていたのだと気づかされました。新入生においては、これから学生同士のつながりを作り出そうとするさなかにこのような状況になってしまったため、非常に大変だったと思います。人と人とのつながりをどのように作っていく



のかが大きな問題だと再認識しました。

松下 北條先生がおっしゃるのように新入生同士のつながりをどのように構築していくか、初年次教育をどうするかは、重要な課題です。本学では、コロナ以前からeポートフォリオを始めていました。1年生は、1週間の行動目標を立て、今週はどんなニュースが気になったとか、何をしたのかなどを記録し、それに教員がコメント

を入れて返すというものです。いわば学生と教員との交換日記のようなもので、これは、大学と学生のつながりという意味では、効果的なツールになったのではないかと思います。

コロナ禍においては、オンライン授業などの工夫で、下宿先や自宅でも授業を受けることが可能になり、大学だけにとどまらない形のキャンパスライフという広がりも生まれました。学生同士のネットワークを、eポートフォリオなども使いながらいかに構築していくか。また、サークル活動などを含めた課外活動においても、Webなどを用いてサポートしていく方法を構築していかなければいけないと感じているところです。

食事をするだけではない 学食という「場」の役割

山田 大学生協の総代や食堂委員長をされていた宮間先生からご覧になって、授業外でのつながりについてはどのようにお感じですか。

宮間 多摩キャンパスは良く言えば緑に囲まれています。

すが、周辺に飲食店はないという環境です。学食は、約2万人の学生の胃袋を満たす責任を負っており、ビル1棟が食堂になっています。学食の運営については、生協職員のほか教員2名、大学職員2名、学生8名で構成される食堂委員会が設置されています。委員の学生たちがメニューや学食のスペースの利用方法などについて、積極的に意見を出してくれており、食堂の運営に活かされています。コロナ禍では学食も長く閉鎖していましたが、今年の4月に対面の授業が増えたので再開しました。当初、学生はそれほど来ないのではないかと予想し、規模を縮小して営業を始めたのですが、予想外に多くの学生が来て、キャパオーバーになったこともありました。なぜそんなに学生が集まったのだろうと、私の周辺の学生に聞いてみると、ただ食事のために来たというよりは、久々に友人と会いたい、話をしたいという学生が多かったようです。それまでは安全に食べることを目的として、テイクアウトへの移行やデリバリーの導入にも目が向いていましたが、学食は食事をするだけでなく、学生同士がつながる場として大切だったのだと再認識しました。それならば、より安心して学食という場を利用して

きる方法を考えなければならぬ、とさまざまな検討を始めています。

キャンパスライフにおける 学生のメンタルケア

山田 最近はメンタルヘルスに悩む学生が増えているという調査結果も出ていますが、その辺りはいかがでしょうか。

松下 本学にはチューター制度（一人の教員が各学年約5名の学生を卒業まで担当し、面談等を通じて学生の夢や進路希望、悩みの相談にのる制度）があり、チューターの先生方が、学科内で2週間に1度ほどの頻度で会議を開き、学生の様子を情報共有しています。そこで出てきているのが、いつでも受講できる環境であるがゆえにオンライン授業の課題が溜まってしまったり、パソコンを開くのがつらいなどの声です。メンタルに問題があるような場合には、専門の支援センターと連携を取りながら最終的には担任が保護者と連絡を取ってクリアしているという状況です。しかし本当に重要なのは、物言わぬ学生たち





加藤 恵津子氏

です。アンケートや面談等に答えてくれるのは、積極的な学生が多いので、そこには上がってこない声に気がつき、ケアしていくのが大切だと考えています。

北條 本学にはアドバイザー制度があるため、基本的にはアドバイザーの先生方が各ゼミや担当の授業の中で学生とやり取りをしています。クラス会なども開催していますが、こちらはコロナ禍でうまく機能していないのが

現状です。メンタルヘルスの側面が危ういという学生が見えにくくなってしまっているため、どのように可視化して必要なサポート体制につないでいくかという工夫が求められていると感じています。

大学として課外活動を どのように支えていくか

山田 これまでは、授業以外は学生に干渉しないというのが多くの大学の姿勢や方針だったように思いますが、このような状況下において、干渉することも必要になってきました。大学と学生におけるこれからのコミュニケーション形成については、どのようにお考えですか。

加藤 この4月に緊急事態宣言が出た際、一度大学として許可した部活やサークル活動を再びストップさせるかどうかは、担当部署内で議論になりました。ただ私としては、緊急事態宣言が出たからといって杓子定規に大学が何かを禁止したり、制限したりしない方がいいと考えていたことから、今年度からは、皆さんのことを信じているので、こういうことには十分注意しながら活動

を続けてくださいという形に変えました。私が学生から直接声を聞いたわけではありませんが、食堂で学生に常に接している方から、学生たちが「緊急事態宣言が出ているにもかかわらず、部活をやらせてもらえている、学生を信じる姿勢がさすがICUだ」と喜んでいるという話を聞きました。

宮間 私は拳法部の部長を担当しているのですが、大学の方針が変わるから活動計画が立てられない、子ども扱 いせずに学生たちを信じてやらせてほしいという声は耳にします。具体的にこれからどうしていくのかは、大学も学生も手探りなのだと思いますが、大切なのは、教室外の活動にも大学が支援をする体制を築いていくことだと考えています。例えば、部活動以外にもサークル室に感染対策を行うなど、やるべきことはいろいろあります。

また、全学的に学生に対する支援はこうします、というブレのない方針を提示していかねばならないと、この1年を通して強く感じました。あちらの学部はこういうことをしてくれているのに、なぜこちらはしてくれないのか、部活動は認められているのに、どうしてサークル・同好会はダメなのかなどという不満が学生から多く

聞こえてきました。

学生生活の充実度を 高めていくために

山田 一人一人の学生が、学生生活が充実していると感じられるように、大学ができることは、どのようなこ



山田 健太氏

とでしょうか。

北條 日本私立大学連盟の学生生活実態調査を見ると、学生生活が充実していると答える人は、所属学部の満足度が高いことがわかります。また、大学の中でいろいろな力が身に付いたという実感がある学生も満足度が高い。だから、大学としては学生がさまざまなことにチャレンジしたり、懸命に打ち込めるものを見つけたりできる環境を整えることが大切なのではないでしょうか。このような状況下において、学生が新しい形のキャンパスライフを模索していることに、大学もしっかりと向き合い、支援していかねばならないと感じています。

松下 学生募集の際、学長と一緒に九州各県を回るのですが、その時に話をするのが「学生の心に火をつける」ということです。心に火をつけて、学生が何かに本気で取り組み始めると、その学生は見違えるように成長します。本学におけるその仕組みの一つが起業部という課外活動です。いろいろなビジネスプランコンテストに学生がチャレンジし、実際に起業しています。授業を聞くだけでなく、学んだ知識を使って社会に対して何かを起すという活動をS O J Oプロジェクト科目として単位

化しています。グループで何かをやり遂げる方向に導いていけるような環境や仕掛けを作っていきたいと考えています。

大学としての方針と 問われる教員の教育力

山田 学生に近い立場にあり、学生と触れ合う中で、学生が求めている充実とはどのようなものだと感じますか。

宮間 人との関わりが希薄になってしまったこの1年の反動もあり、交流の機会を求める学生が増えているように感じています。学生同士もそうですが、教員と積極的に関わろうとする学生も皮膚感覚では増加しています。教育のためのオンラインツールが整備されたことで、学生と教員との壁はある意味では下がったように感じますし、最近は私の研究室にも頻繁に学生が来て、何気ない相談・雑談をしていきます。大学としての方針はもちろん必要ですが、現場の教員一人一人が、学生の個性に合わせてどのような接し方をしていくのかも重要で

す。教員に研究力だけでなく、教育力がより求められている時期だと感じています。

加藤 コロナ禍でさまざまなツールが身近になり、学生と教員との壁が低くなったことは、良い側面もあると思います。それと同時に、学生目線の充実の尺度ばかりにとられるのではなく、大学の考える尺度もきちんと出しておくことも必要だと考えています。例えば本学ではface to faceの対話を大切にしており、大学に来て人と交わることを重視していることを学生に理解してもらい、彼らを導いていかなければならないと思っています。

社会に出るために 必要な力をつけるには

山田 これまでも大学の「売り」としても「面倒見の良さ」を強調することがありました。ただしその意味するところが、このコロナの前と後とは変わっていくことも考えられます。少し大きな話になりますが、大学に求められているものとあわせて、学生への期待も含めてお話しただけですか。

松下 大学は、学生が社会に出る前に身を置く最後の学校です。そのため、彼らが何とか社会に出るために必要な力をつけてあげることが求められます。4年間で何かにチャレンジする、失敗してもそれを経験値として積み上げていく、仲間と何かを成し遂げる満足感を得る――。一人でも多くの学生がそういった経験をできる仕組みを、授業や課外活動を通じていかに作っていくかが、これからの大学には必要だと考えています。

宮間 私の場合は、大学全体というより、目の前にいる学生一人一人を見ながら、彼らをどのように社会に送り出していけばいいかということを考えてきました。そのような中でやはり心配なのが、コロナ禍で大学に順応できずに脱落してしまう学生です。学生同士も、学生と教員もコミュニケーションを取りづらい現状で、何ができるかを常に考えている状況です。一人でも多くの学生が満足して卒業できる環境を作っていきたいと思っています。

北條 ここ最近では、大学が社会にとってどうあるべきかなど、大学の在り方、大学像というものが揺らいでいる時代だと思えます。コロナ禍を通じて、この状況はますます加速していくでしょう。そんな中で、教員中心だっ

た大学は、学習者本位、学生本位の方向へと見直されていくと思います。学生一人一人の力をどのように引き出していくのかを、大学はもつと意識しなければならいと考えています。4年間で、学生が自分の発想でチャレンジできる、自分の可能性を発揮できる環境を整えていくことが必要です。そのうえでこぼれ落ちてしまう学生をいかに少なくしていくかも重要な視点だと思えます。

個別的、かつ総合的なサポート体制をいかに構築していくかは、これからの大きな課題です。いまの大学に問われていることはたくさんあります。学生としっかり向き合いながら、改革を進めていかなければならないと考えています。

加藤 他者との関係構築や場に適応するために必要なことは、一人の人格として名前で呼ばれることだと考えています。それはオンラインでもできることで、教室で授業を受けていれば名前がわからなかった学生でも、オンラインなら名前がわかるため呼びやすい。そうしたオンライン上の出会いも多かったと思います。しかし、こうしたオンライン上の出会いは、ログアウトしてしまえば終わってしまいます。オンライン上で出会ったつもり



なってしまう、やはりキャンパスという具体的な空間において、偶発的に起こる出会いも含め、いろいろな人たちから名前と呼ばれ、人格を形成してほしいと思っています。社会に出る前の4年間、自分の強さも弱さも含め、友人や先生に自分を理解してもらいながら成長できる、大学がそういう場であればと願っています。

山田 本日は、さまざまな側面から、キャンパスライフ、学生の充実度についてお話を伺いました。新型コロナウイルスの影響により、大学は多くの課題と出会い、それを乗り越え新たな在り方を模索することになりました。先生方のお話を受けて、それぞれに新たな気づきもさらに考えるべきこともあったかと思えます。本日は貴重なお時間とご意見をありがとうございました。

